

## 白夜の川をカヌーで行く

平成6年6月、不況と言われる最中、就職活動に追われてリクルートスーツに身を固めた学友を後に、我々探検部員6名は伊丹空港を飛び立った。4年生2人と3年生4人の隊員構成で、4年生は就職活動を来年に延期しての遠征であった。

この遠征は、北米大陸西岸を縦走するロッキー山脈最北端（カナダ）に源流を持ち、アラスカ半島の中央部を東から西へ貫き流れた後ベーリング海に注ぎ込むユーコン河の全長3000kmをカヌーで下りながら、流域に住んでいるアサバスカンインディアンやユピックエスキモーの人々と交流しようとするものであった。北極圏に近い河川は一年の半分以上が2m以上の氷雪に覆われているため、雪解け水が流れる短い夏を狙っての航行であった。平成4年の6月に発案して以来、全流域を手漕ぎで乗り切る体力・技術を養成するために毎日昼休みのトレーニングと日本国内のあらゆる河川を利用した年5回の訓練合宿を欠かさずに行い、合間をみてはアルバイトをして遠征資金を準備した。最も思い出深い訓練合宿だったのは何と言っても真冬に北海道の石狩川と天塩川をカヌーで下った事だ。気温は零下10度を下回り河川の両岸は2m近い氷雪の絶壁で上陸することも容易でなく、しまいには川自体が凍結して先に進めず、何日も雪の中で立ち往生したこともあった。

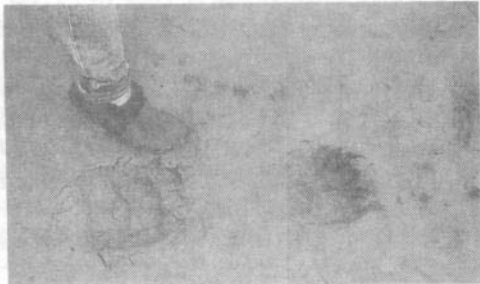
我武者羅に動き回った2年間の準備期間はあっと言う間に過ぎ、気が付いてみると我々はユーコン河源流湖沼群のほとりに馴染みのテントを張り3000km先の海に遠く思いを馳せながら翌朝の出航を寝袋の中で待っていた。源流部は、標高が高く、季節はまだ初夏であったので周りの山々の頂きには雪が残っており、山地から吹きおろす風は強く冷たく、完全防寒するくらい肌寒かった。遠くに見える真っ白い山を一つ越えればすぐ太平洋が迫っていて、ゴールドラッシュ時代は探金者たちがあの険しい山々を越えて来てユーコン河に船を浮かべてアラスカ方面へ旅立って行ったという。源流部の水質は実に素晴らしい。水深5mも有ろうかと思われる場所でも天気の良いれば底まで透き通って見える程で、地元の人が我々のカヌーが浮かんでいる川の水をコップに汲んでガブガブ飲んでいた。

そこから北極圏まで流れに乗って夏の到来を追いかけるかのように白夜の川をどんどん北上して行く。この間、天気急変とそれに伴う突風は想像を越えたもので3艇のうち2艇が転覆する始末であった。3度目の転覆が起きたら遠征を中止すると隊員たちに発破を掛けていたのでそれからゴールの前日までは転覆はなかった。源流湖沼群からカナダ・アラスカ国境付近までのカナダ・ユーコンは、かつてユーコン河支流で金鉱が発見され一獲千金を夢見た多くの人々が往来したゴールドラッシュの面影を残し、流域の町は観光地としてハイウェイで大都市と結ばれている。人口の大部分はゴールドラッシュ時に入ってきた白人で、近代化された町の中、インディアンの人々はどこへ消えてしまったのだろうか。夜の酒場で酔い潰れている彼らの横顔には寂しさが漂っていたような気がする。

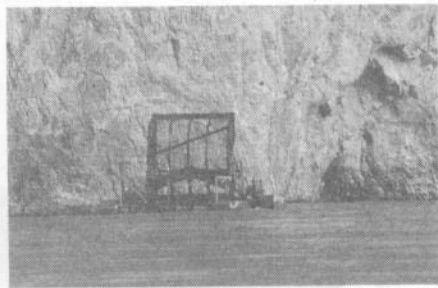


国境を越えアラスカに入り、スタートしてから1カ月かけて北極圏に到達した時はちょうど夏真っ盛り。大阪は例年にない猛暑で水不足が深刻だと国際電話で聞いていたが、アラスカも例外ではなく日中は30度を越える日もしばしばあり、航行後の水浴が日課となっていた。アラスカといえば年中雪と氷の世

界と誤解している人もおられるが、とんでもない。夜になっても太陽は沈まず寝ている間にも暑さで体力を奪われるほどだった。白夜の下では短い夏を謳歌しようとして一晩中活動する動物にも閉口した。小さいものでは我々の血液を狙う星の数と同じくらいの蚊やアブ、大きいものになると体長2mから3mもあるであろう熊。常に熊の足跡のある場所を避けてキャンプしていたので襲われずに済んだが、寝ている間に我々を食いにやって来るという恐怖感はたまらなかった。テントの両端で寝る隊員はさぞ怖かったであろう。ある朝、対岸をうろつく4匹の熊を見たが、遠くから見る分にはタヌキを数十倍大きくした感じで可愛いものだが近づいて見るとタスマニアデビルを数百倍大きくした感じで実に恐ろしかった。



アラスカ半島内陸部ユーコン河流域には、アサバスカ・インディアンという種族が広域にわたって住んでいる。アラスカに入るともはや観光地なるものはなくなり、正に先住民の生活の場所であった。今までインディアンに対して我々のもっていたイメージはアメリカ本土のように居留地に閉じ込められている、といったものであったが、アラスカに住むインディアンは違っていた。雄大な大地を舞台に夏はサーモン漁、秋はへら鹿・カモ狩り、冬は罟漁やハンティングと、100馬力のエンジンを搭載したボートでライフル銃を片手に縦横無尽に走り回っている。民家の屋根の上には冬の足となるスノーモービルが駐車してありいまにも発進しそうであった。各村によってその規制も違ってくるが禁酒を除いては自由な暮らしをしている。一般に彼らは酒に関しては、なくなるまで飲む。ごく当たり前のことだが彼らの場合は酒が有る限り仕事も捨てて飲み続けてしまう。だから自治体を中心に禁酒の動きが活発で村への持ち込みも禁止されている。見つければ罰金を課せられるが、村にはブラックマーケットがあり値段は膨れ上がっているが繁盛しているようだった。我々がここアサバスカン・ランドを通過した時季はちょうどキングサーモン漁の最盛期。人々は漁をするため川沿いの森の中にキャンプを張ってフィッシュ・ホイールと呼ばれる細い樹木で作られた高さ4m程の水車のようなものを川の流れて回転させ溯上してくる鮭を捕まえ、スモークにして保存食にしている。このインディアン製スモークサーモンが格別に美味い。添加物の入った市販品とは雲泥の差といっても過言ではなく、いくら食べても食い足りないほど美味で、日本の皆さんにも味わってほしいと何度思ったことか。



ユーコン河が北極圏に到達した後進路は一転、南西に向かいベーリング海をめざして流れている。足早に過ぎ去る夏を後に我々も冬の到来から逃げるように南へ向かって航行を続ける。毎日地平線の果てまで河が見えていて、いつになったらあそこまで行けるのだらうなどと考えつつひたすら漕ぎ続ける。夏か

ら冬に季節が変わる時、この地域では多量の雨が降り、幾日もテントに閉じ込められる日が続いた。沼地が多いツンドラ地帯での雨は悲惨で、テントの中は魚が泳げる程浸水し、ほとんど水の中で眠った事もあった。ユーコン河口の巨大三角州地帯に入ると流域の村々がアサバスカ・インディアンのものでベーリング海沿いに住むユピック・エスキモーの集落に変わり、いよいよ旅の終わりが近いことを実感する。ユピックの人々の生活は、夏の間の鮭漁はさし網を使い、スモークサーモンをつくったりアサバスカンと変わらないようであったが、冬になると凍結した海上をスノーモービルや犬ぞりで走り、鯨漁やアザラシ漁に出掛ける。表情もアサバスカンと比べてやや柔らかくなり益々日本人にそっくりである。無言でニヤリと笑う表情をするのが挨拶であり、ウラックと呼ばれる扇形のナイフを使い肉や魚を切る姿は正にイメージ通りのエスキモーの人々であった。

日中の平均気温は急に低下し辺りの草の葉は赤や黄色に変わり、夏も終わっている。今まで奥にしまい込んでいた防寒着を数カ月ぶりに着込んでの航行だ。海に近づくに従って山は一切なくなり、まわりはツンドラの大平原。景色は正に川と空と草だけで、秋晴れの中をどんどん進む。そしてとうとう最終目的地であるベーリング海沿岸のエスキモー村に到着したのは白夜などとくに消え失せた9月の中旬で、実に3カ月を越える川旅であった。歓迎を受けた我々はユピックの人とベーリング海へアザラシ漁に出掛け、最後のユーコン河を満喫した。

そして最後の最後の夜は幸運に、今まで目にすることのできなかったオーロラが北の夜空に舞い、我々が無事ゴールできたことを祝福してくれたのである。



振り返ってみると時間がたつのもものすごく早かった。毎日漕ぎ続けている時は先はまだ長いと苦しんでいたが、いざ終わってみるとたかが3000キロである。日本列島の長さとはほぼ同じ距離を自らの手で漕ぎ続け、時として川幅が10kmを越え突風で大波がたち転覆したり、野獣に脅やかされたり、現地の人々と交流したり様々な事を経験した。同時に地球温暖化や民族自決をはじめとする様々な問題を改めて考えさせられた旅であった。

